

# 平成16年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名

学名

アオダイ

*Paracaesio*  
*caerulea*

ヒメダイ

*Pristipomoides*  
*sieboldii*

オオヒメ

*Pristipomoides*  
*filamentosus*

ハマダイ

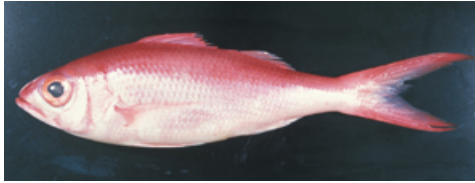
*Etelis*  
*coruscans*

系群名

奄美諸島・沖  
縄諸島・先島  
諸島

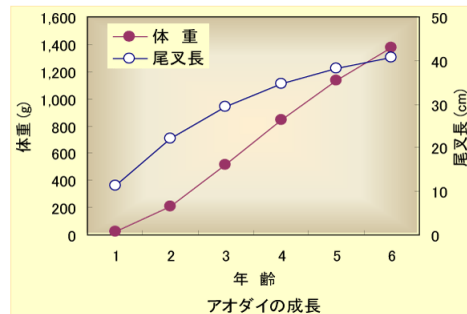
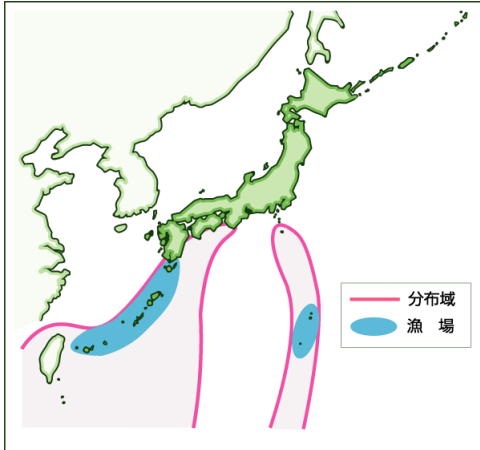
担当水研

西海区水産  
研究所



## 生物学的特性

寿命： 不明  
成熟開始年齢： アオダイは4歳、ヒメダイは不明、オオヒメは不明、ハマダイは12歳  
産卵期・産卵場： 4種とも産卵期は4～8月、産卵場は不明  
索餌期・索餌場： 不明  
食性： アオダイは大型の動物性プランクトン(サルパなど)、ヒメダイとオオヒメは魚類やヒカリボヤなど、ハマダイはイカや魚類  
捕食者： 不明

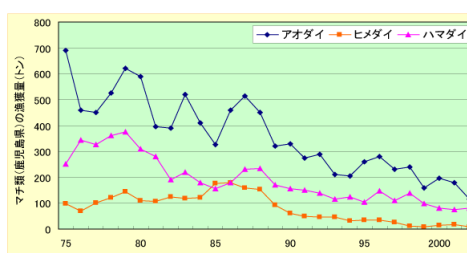
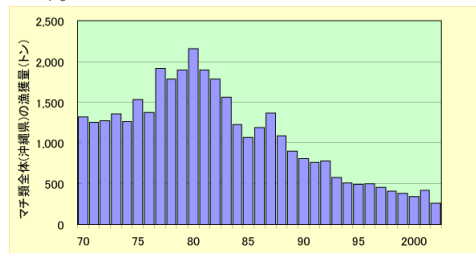


## 漁業の特徴

水深100m以深の深海底魚一本釣りによる漁獲が多いが延縄でも漁獲される。周年操業する漁業者が多いが、ソデイカ(漁期11～3月)との兼業も行われている。1航海当たりの操業日数は5トン未満の小型船で日帰り、または2～3日。5トン以上の船で1週間程度。

## 漁獲の動向

沖縄県におけるマチ類全体の漁獲は、1980年に2,159トンの最高値を記録した。しかしその後の5年間に急速に減少した。最近5年間の主要4種の漁獲の動向は、ヒメダイとオオヒメで横ばい、アオダイとハマダイは減少傾向である。鹿児島県においてもヒメダイは横ばい、アオダイとハマダイは減少傾向が継続している(オオヒメは単独種での情報がない)。

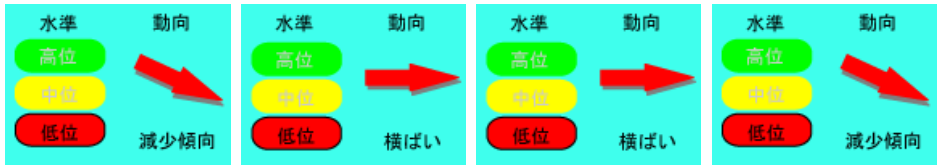


## 資源評価法

鹿児島県については鹿児島市中央卸売市場年報の取扱量を漁獲量と見なし、経年変化から資源水準、動向を推定した。沖縄県についても各地区漁協および県漁連市場での水揚げ記録を集計し、漁獲量のデータに基づいて資源評価を行った。

## 資源状態

沖縄県におけるマチ類全体の漁獲量水準は、ここ40年間に大きく減少した。この間のマチ類に対する漁獲努力量が大きく変化していないと仮定すると、マチ類の資源量は大幅に減少したと推定される。主要4種の資源の動向についても、沖縄県におけるオオヒメは漁獲量を把握できている1989年以降はほぼ安定しており、ヒメダイも最近5年間は横ばいである。しかし、アオダイとハマダイは減少しており、特にハマダイの減少が顕著である。鹿児島県におけるヒメダイは最近5年間横ばいであるが、アオダイとハマダイは減少が認められる。このようにマチ類の資源は1980年代以前と比べて漁獲量が減少し、回復する兆しが認められないことから、資源水準と動向は、アオダイとハマダイは低位で減少傾向、ヒメダイとオオヒメは低位で横ばい傾向にあると判断される。



アオダイ                      ヒメダイ                      オオヒメ                      ハマダイ

管理方策

マチ類は平成15年度に水産庁の進める資源回復計画の対象種に指定され、2004年6月現在、計画策定に向けて素案の検討が行われている。一本釣り(及び底立延縄)漁業の対象種として資源を管理し、増大させるためには小型魚の保護が必要であり、休漁区を設定して周年あるいは一時期の漁獲を停止することにより再生産に加わる個体数の増加、ひいては産卵量と加入量の増大効果が期待される。

資源評価のまとめ

- 沖縄県と鹿児島県におけるマチ類主要4種の漁獲量は減少傾向
- アオダイとハマダイの資源水準と動向は低位で減少傾向、ヒメダイとオオヒメは低位で横ばい傾向

管理方策のまとめ

- 資源水準の回復のためには漁獲努力量の削減が必要
- 水産庁では2004年6月現在、資源回復計画の素案を検討中
- 休漁区の設定により周年または一時期の漁獲を停止する方策が効果的と考えられる
- 上記方策により小型魚の保護、再生産に加わる個体数の増大を図り、産卵量と加入量の増大効果を期待する

資源評価は毎年更新されます。